

# 緑ヶ丘通信

青山学院大学体育会山岳部OB会

No.30

発行

1989年1月1日

発行所

緑ヶ丘山岳会

〒103 東京都中央区

日本橋3-2-13

内

株 中條企画

## 小島隼太郎名誉会長追悼号

今号は、昨秋、他界された小島隼太郎名

誉会長の功績をたたえ、その足跡をたどり、

氏を偲ぶため、特集としました。

## 記 録

\*まず、「関東学生登山連盟報告第2号」(一九三〇年)より、一の倉沢二の沢初登攀記録を転載します。

## 谷川岳一ノ倉沢

一行 小島隼太郎、松尾敏夫、立

花勝郎

七月九日 水上―湯檜曾

十日、十一日 雨 滞在

十二日 湯檜曾(二〇・一〇)ガソ

リンカーに乗せて戴く―土合―マ

チガ沢―一ノ倉沢湖行―幕営地

(四・一〇)

雪渓の中程迄登って見たが適当な幕営地なき為引返し、廊下状をなしてゐる所のや、下方、デブリと思はれる残

雪の傍に幕営す。

十三日 幕営地(六・三〇)―雪渓を離れ東肩よりの沢に入る(七・五〇)―二股(二〇・四五)―スラブ(二二・一〇)―鋸岩(三三・三〇)―再び沢に入る(四二・二〇)―東肩(六六・三〇) 露営地(八・〇〇)

谷川岳附近の山名に就て、良否の程はわかり兼ねますが僕達の呼んだのを書いて見ます。

地図(湯沢)の谷川富士(一九七四・二米突)を一ノ倉岳

その南の一九六〇米突の等高線を有する峯を谷川富士、地図(四万)の谷川岳を薬師岳

以上の二つ、谷川富士と薬師岳、又は耳二つ

一ノ倉沢とマチガ沢との間の尾根を谷川岳東山稜。

その一部、谷川岳の東肩より下つた

ところにある三つの並んだ)之を西黒沢に下る尾根上より見る時は鋸の歯の様に見えるので鋸岩。

日本山岳会の武田氏の呼んでおられるのは多少違つて居りますが、僕達は最も適当と思つて呼んだ迄です。

私達の登つた谷は谷川富士の東肩から発して居る溪谷であります。ですから一ノ倉岳より落ちる谷を本谷とします。とそれより左へ数へて二番目のものです。一番目のものは恐らく谷川富士頂上附近から発して居るものと思はれます。で、一ノ倉沢より谷川岳へ登るには当然一番目か或は二番目の谷を登るべきです。一番目のものは一ノ倉沢のほゞ正面に懸り、遠望しますと殆ど瀧の連続で、その周囲の岩壁は盡く逆層を呈し、刻へ部分的にオーバーハングして居りこの三つの谷の中で最も困難なものと思はれます。僕達が一ノ倉を引上げる朝、猛烈な驟雨でこの懸谷は一條の大瀑布となり非常に壯観でした。

私達の登つた谷も上方に数段の瀧が認められますが、そのや、下方に於て谷は二分し、瀧の方は谷川富士の東肩に通じ、左の方を登れば鋸岩に到るのです。僕達は左の谷を登り一たん鋸岩に出て再び右の谷の瀧の上方に下つたのです。この二つの谷の間の尾根は非常に急峻な上、灌木が密生して居り、その登攀は実に想像以上です。左の谷に入つて間もなくスラブがありそれをまく為尾根にとついたのですが余り

馴れないブッシュには全く閉口しました。それ迄の岩壁は下方は傾斜も緩くホールドもかなり豊富ですが、登るに従ひ傾斜も増しホールドは乏しく其の上処々に生じた苔状のものは頗る水分を含み不愉快でしたがアンザレインのもとに何等の不安もなく登る事が出来ました。総じて層は逆、岩はサウンドでした。

東山稜は遠望しますと殆ど岩のやうですが實際は灌木及び笹に覆はれてあります。僕達は鋸岩から少し登り初めた時微風にそよぐ笹葉の音にまちつて僅な水音を聞く事が出来ました。もし僕達がこの水音に不注意だつたならば、恐らく予想外の困難に遭遇した事だろうと後になって知りました。腰さへ下す余地のない急峻の尾根上に水無き一夜を明かさねばならなかつたのですから。つまり僕達は可及的に荷を減少する為水筒を二つしか持つて行かなかつた事が聴神経を鋭敏にしたのでした。

この水は東肩より発する谷に流れてゐたのでした。勿論僕達の登つた谷の右のもの、瀧の上部なのです。水は極めて僅ですがそれでもテルモスにコ、アをわかすには充分でした。そして僕達はこの谷を登るの、如何に容易であるかを知つたのです。も早夕暮は迫つてゐましたが僕達は自信を持って登つて行きました。肩と思はれる所に達した時、終日雲で隠れてゐた谷川岳の峯頭は雲のさげ目に突然その姿を表はしたかと思ふとそれも瞬間、あとは濃い

暗に見えなくなりました。しかし私達の居る所は谷川岳の絶頂と指呼の間にある事を認め得ました。私達は再びアンザレンを為し手さぐりて進みました。勿論其処が露宮に適してゐなかつたからでもあります。私達はそこに止まる余裕を持つてゐなかつたのです。一ノ倉沢より谷川岳への最初の足跡を瞬時も早く印したかったです。しかし星さへ瞬かぬ完全な暗は私達にそれ以上の前進を興へてはくれませんでした。とある岩上の狭地に僅に腰を下しアンザレンのまゝ、夜明を待ちました。短かるべき夏の余りにも長かつた事、霧雨に全く体が冷えてしまつた時漸くわいたミルクをすゝつた事、夜半月明に肩を壓して獲ゆる岩峯を仰いだ事、そしてなんとその感嚇適だつた事、今は甘い思ひ出です。

十四日 露营地(四・五〇)―谷川富士(五・〇〇)―西黒沢に下る(七・五〇)―土合(一・一五)―一ノ倉幕营地(三・〇五)

笹の頂きがほんのり赤く染まる頃私達は遂に谷川富士の頂きに立つ事が出来た。この頂きこそ月夜野からはあこがれの眼を以て望み、昨夕東肩からは希望の眼を以て視た頂きである。谷筋に返して尾根は全く平凡である。西黒沢で昼寝をして一ノ倉に帰つて来た。天幕の番をさせて置いた大夫の中沢が驚訝な顔で下から登つてくる僕達を迎へてくれた。

十五日 幕营地(一〇・三五)―湯

檜曾(二二・五〇)

十六日 帰京

\*続いて「関東学生登山連盟報告第一号」(一九三一年)より、一の倉沢本谷初登攀の記録を中心にした「谷川岳研究」を掲載します。

(二の沢については前項と重複するので省略しました。)

## 谷川岳の研究

小島 隼太郎

### 谷川岳附近の研究に就いて

初めの計画では谷川岳、武能岳間の上州側及び越後側の研究発表を為す積りであつたが、種々の事情の爲、甚だみすばらしいものとなつてしまつた。結局、上州側のみ、(谷川温泉よりする登路を省く)を発表する事とした。学生連盟加盟校のメンバーに依り、上州側は、大体研究されて居るが、それに反して越後側は僅かに、法政の先輩連に依つてのみ、登高がなされた位である。上越線が開通して非常に便利となつたから、今後越後側も連盟のメンバーに依り、度々訪れられる様になるだらう。谷川岳、武能岳間の地勢は、概して上州側は急峻であり、越後側は

緩やかである。谷川岳、茂倉岳間東面(上州側)岩壁の如きは、岩登りの対象として、多くのクライマーに依つて訪れられて居る。

マチガ澤、一ノ倉澤、ユウノ澤の岩壁は、何れも相当に面白いケレンデを持つて居る。

岩質が割合に堅牢であるのは結構だが尾根づたひに登ると異なつて、澤の中でのクレッチライなので、暗い気分するのはやむを得ない、遠くから見るとすつきりした岩壁の様であるが、いざ近よると草が生えて居たり、はじめして居たりして失望する時もある。積雪期に於ける谷川岳の登路は谷川温泉よりするものがある。西黒澤、マチガ澤を溯行するものがある。西黒澤及びマチガ澤を登路として選ぶ際には注意すべきである。相当物凄いのが出るやうである。

「谷川岳附近の研究」の中「武能岳より谷川岳への環境尾根」はあの辺の詳細なる紀行文が少ないので、掲載してみたのである。とにかく「谷川岳附近の研究」は羊頭を掲げて狗肉にも至らなかつた事は真に心苦しい次第である。

### 一ノ倉澤

◎まへがき

一ノ倉澤が登山者にアタックされて以来、まだ年月もわづかしかたつてゐません。が一ノ倉澤は昔、大穴の

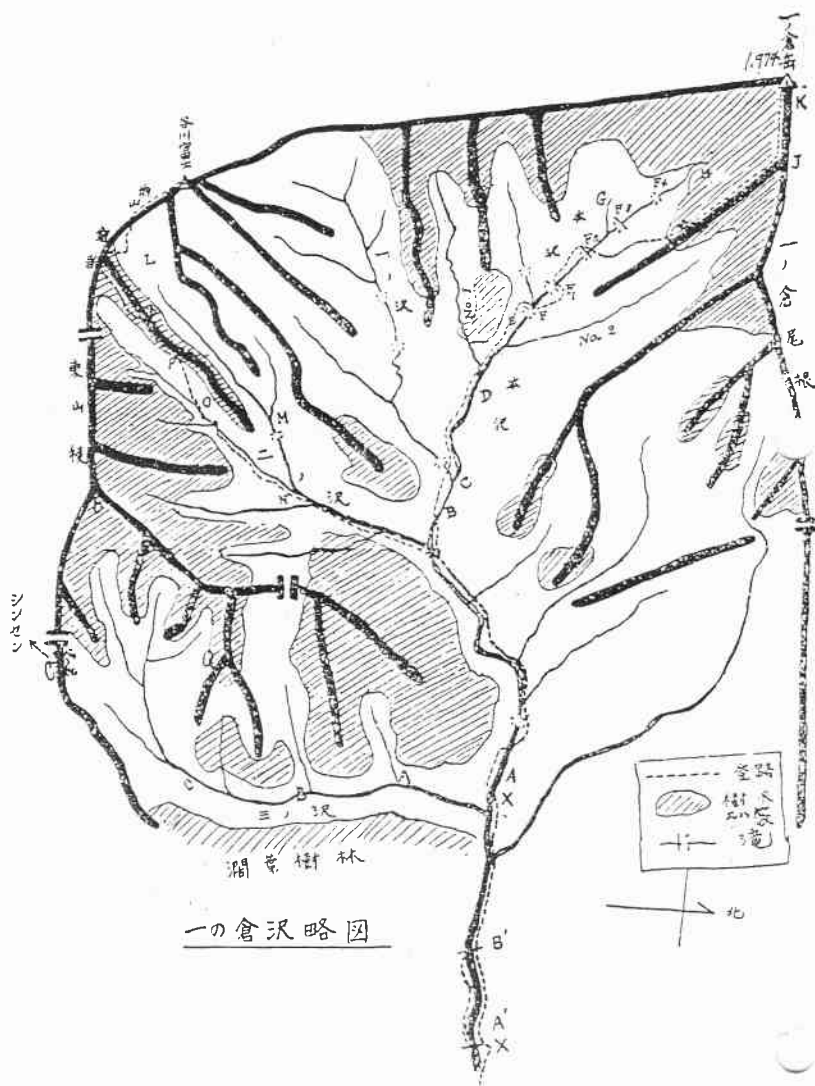
獵師が入つてゐるさうで、澤だの特徴ある岩などには、名称がつけられてゐるようです。例へば東山稜の一岩峰「シンセン」などはそれです。此の一文は僕達グルッへの持つ知識が甚だ貧弱なものですから、五十嵐君(早大)から材料を提出して貰つてどうやらまとめ上げたものです。僕は本来、筆をとると頭が痛くなる性分です。意味のとれぬ所もあるだらうと思ひますから、そこは御勘弁の程を願ひます。

### 一、本澤

状況

五月中旬。(昭和五年)

旧国道との交差点から雪を踏んだ。一幅の岩帯が澤を横切つて急流をなす所は既に口を開けてゐた。其の手前は右手の尾根から落ちた雪崩が、枯草と小石を交へて鮫の頭を並べた様にデブリを残してゐた。B点は常に雪質が非常に硬化してゐる。三回程行つたが、常に硬かつた。クリセードの時は注意すべきだ。C点附近は澤の走向にクレパスを開けてゐる。そして其処からD点まで雪浜が切れて岩床を出してゐる。傾きのゆるい階段を登る様に真に容易に行ける。Dから再び雪浜が続く。E Fの間が切れて居る。Gには未だ雪板を残して居る。此の頃は既に澤の両側に相当なベルグシユルンドが出来てゐるので、注意しなければならぬであらう。又高みにかゝつて居る雪板が時折欠けて落石のやうにブロックを落す。又C



一ノ倉沢略図

点ではブツカキ氷の様に積み合った雪が、突然ピツタリと、口を閉がる事がある。一屯以上もあるやつに挟まれ  
たら凄いな事になるだらう。  
六月中旬。(昭和五年)  
二の澤が出合ふ下に左側に、大きなクレヴァスが開く、一ノ澤が龍となつて落ちる辺りは、其処(澤の左寄りの方)は岩床がグツト傾斜を増して居り、且ホールドが少ないので、ズツト右へ寄らないと登り難い。DEの間は未だ

雪溪が残つて居る。Fはゴルヂユになつて居り、チヨークストーンを持つて居る龍(水流は無し)が出来てゐた。Gは皿の様な岩床で、Hは草付きの中に細々と岩はだを見せた水流の跡にすぎない。  
No.1の澤が本澤に入る一段上は、草付きである。(白山イチゲだと思ふが植物には自信なし)此の草付きは右の縁からも、左からも、上の段に行か

る。No.2の澤はすつかり雪が消へて居る。大きなチヨークストーンを沢山持つた細く深い岩溝で、下部は右側が揃めるがすぐあの壮大な岩壁になつてしまふ。六月中旬は南面(右側)には少しも雪が残つて居なかつたが、一ノ澤が非常に大きな雪のプロツツを数個、澤の真中へ落した。これは一ノ澤が北向きなので、未だ澤の頂近くに雪を残しているからである。C点からのグリセードは愉快である。(以上五十嵐君

の報告)

十月中旬。(昭和六年)

一ノ倉沢の入口はゴロ／＼した岩石が散乱してゐて、澤の中程を水が流れてゐる。然し水量は少してある。A点まではゴロ／＼した河原が続く。A B間は小さな廊下をなし、岩の上を水が樋の中を流れるやうに流れてゐる。岩が水に浸蝕されているので、ネイルドブーツだと非常に歩きにくい。大体に於て左側について登つて行ける。この廊下を通り抜けると又ゴロ／＼した岩石の河原に出る。三ノ澤(カラ澤)の入口までわずかだ。Aから二ノ澤が本澤に落ちてゐる点までは大小様々の龍の連続である。Aは左右何れへも巻いて通過出来るが、下手に巻くと非常な骨折をしなければならぬ。それより寧ろ我先になつて、龍のすぐ右の所をダイレクトに登る。ホールドは少い、注意して登る事を要する。Aより二ノ澤が本澤に落ちる点までは、龍をダイレクト或は左に右に巻、相当に頭をなやます所である。二ノ澤と本澤との出合よりBまでは、かなり深く澤の中央が裂れてゐる。B点は少量の残雪がアーチ形をなしてゐた。BよりEまでは傾斜の緩い岩床で染なクライムが出来る。ビギナーのトレニングに良い所がある。Eより上は物凄く龍のある所で、悪場の連続である。水流はきはめて僅かで、七月より少いやうである。Eは無理をすればピワークの出る場所もある。(龍の事については

後に書きます)

## 記録

一行、小島隼太郎

大倉 寛

井上 文雄

(昭和六年)

十月十五日 湯檜曾(一、四五)

一土合(二、四五—三、

一〇)——ノ倉出合

(四、〇〇)

十六日 一ノ倉假小屋(一一、

五〇)——カハグルミク

ボ(一、〇〇—一、三

〇)——二ノ澤出合(二、

五〇)——キャンブ(三、

三〇)

十七日 キャンブ(八、〇〇)

一岩壁下(一一、〇〇

一一、二〇)——ノ

倉岳(五、二〇)

十月十六日

一ノ倉澤出合の小屋の前で、一の倉

の壮大なバットレスを見ながら、今日

のうらかな日光を満身に受けて無為を

楽しむ。友も或は紅茶をす、り或はパ

イプを銜へて楽しそうである。あたり

の静かさを破るのは湯檜曾川のせ、ら

ぎだ。空には雲の一片だになく全くの

秋である。こんな和やかな気分を享樂し

ていゝと、動いたり歩いたりするのが

億劫になつて、誰一人出発準備にとり

かゝるものがない。時間がたつばかり

である。一ノ倉気分でも云ふのか、

兎に角優秀そのものだ。一ノ倉澤の方

向に焚火の煙が、かすかにたゞよつて

いる。登山者がいるのであろう。小屋

の前を通りかゝつた一人の男が、「一ノ

倉ですか」と声をかけた。この男は大

穴の猟師で、内山亀之助君だつた。面

白い男で、雪崩や猟の話をしてくれた。

一ノ倉にも相当猟の経験をもつてい

らしい。澤だの尾根について、なか

／＼詳しい事を知つてゐた。僕達が本

澤の様子を聞いたなら、あそこは手掛が

ないから登れないと言つた。一寸心細

くなつたが、兎に角、行つて偵察だけ

でもしようと思つて、出発の準備にと

りかゝつた。

平野、原田、佐野のサポーターインク、

パーテイと別れて、僕達は一ノ倉の河

原を上りだした。荷が重くないので行

程がはかどる。廊下も思ひの外早く連

過して三ノ澤の出合についた。三ノ澤

を「カハグルミクボ」といふのが猟師

間の呼名らしい。三ノ澤の出合から、

牙状の岩峰がそ、りたつているので見

える。この岩峰は内山君によると「シ

ンセン」と云ふのださうな。

三ノ澤出合より一寸歩くと最初の瀧

にぶつかつた。荷物を背負つては、こ

の先は困難なので、一時こゝに荷物を

置き先に進む事にする。右に高く巻い

てみたが、下りが悪くかなり時間をと

つてしまつた。幾つもの瀧も通過して、

二ノ澤出合まで行つてみたが、ビワー

クするのに適當な所がないので早速引

き返した。A点より二ノ澤出合までは

足袋(足袋)いた。ネイルド・ブーツでは

とても登れない。三ノ澤の対岸、又点

にテントを張つた。附近に水はあるし、

枯木もすぐそばにある。又眺望も良い。

実に良い幕営地だ。少し暗くなり初め

た頃、三ノ澤より三、四人下つて来た。

一ノ倉澤を少し溯つた所にテントを張

つて居た人達だらう。この夜は、小さ

なテントに三人で寝たので暖かく過せ

た。

十月十七日

昨夜は熟睡したので、今日は三人共

元気が良い。パン、副食物、防寒具を

ルックザックにつめて、足袋靴先でテ

ントに別れを告げる。今日は昨日の快

晴に引き比べて、甚だ心細い天気だ。

日光は雲にさへぎられて見えぬ。天候

の悪い日は、大抵一ノ倉バットレスは

霧に盖れるやうであるが、今日は国境

線が良く見えるので、今日一日位は雲

つたま、でもつもの見当をつけた。

一ノ倉は快晴の日でも、なんだか陰気

な気分を漂はす処であるが、曇りの日

は猶更の事である。

第一の瀧を無事に登り先づ今日の門

出を祝福する。第二、第三と熱勘に出

て来る瀧を切抜けながら、天候を気に

して、時々振り返る。武尊山あたりに

雲がどんよりと溜つてゐて一寸心配に

なる。遂に二ノ澤出合に到着し、休憩

する。この辺で雨にあつても、テント

まで帰るには相当困難なのであるから、

クリフに取りついてゐる時にでも降ら

れやうものなら、命掛けになつてしま

ふ。こんな考へを三人(三人)してゐるの

で、快活な気分にはなれず、話をな

べく愉快な方面に向けやうと努力する

が、やはり自然と気が沈む。

B点にある残雪はアーチ形になつて、

澤の中程に立つてゐる。アーチの下は

雪のブロックが、散乱してゐて、見て

ゐても気味が悪い。昨夜、テントの中

で聞いた不気味な音の正体は、この雪

渓の崩潰であらう。二ノ澤出合から本

澤の水流に沿つて行くのが、時間的に

経済であるが、B点の雪渓を通り抜け

るのが不気味だから、左に巻いて行く

事にする。二ノ澤出合からBまでは、

溪流の影響からであるのか、ひどく浸

蝕されてゐる。B点の手前まで行つた

時は、十時近かゝつたので、今日は登

高を見あはせようと決め、ルック二個

を其処に残し、一個に食料を少しつめ

て出発した。BよりEまではElevation

をなしてゐる、快適な容易なゲ

レンジである。

Eで各自思ひ／＼にノビながら本澤

を見上げた。天候は朝から今まで少し

も変化せずに、相不変の曇りである。

本澤を仰いでゐるうちに、むら／＼と

登高欲が頭をもたげて来た。三人期せ

ずして、登らうぢやないかと云ふ事にな

つた。天気もどうやら今日一杯もち

さうだし、食料は二食分あるので心強

い。たゞ足袋は一足しかなく、草鞋も

無いのが残念だ。一ノ倉岳へ行けば、

サポーターインク、パーテイも居る事な

のだから、それを頼みにして兎に角登

高と相談一決した。丁度その時は、十

時半であつた。早速ルツクザツクから三十米のザイルが取り出され、オーダーをK、O、Iと決めクリフに取りついた。

Eの上Fは小さな瀧である。水流の左に沿つて登つた、別に困難な所もなくデイレクトに。上はテラスになつてゐて、すぐ前にF<sup>1</sup>の瀧が落ちてゐる。F<sup>1</sup>は右巻にして登る。サウンドロツクだから快適のクライムを味ふ事が出来る。F<sup>2</sup>は左側を初めデイレクトに登り、少し右にトラヴァースをする

と、F<sup>2</sup>とF<sup>3</sup>の間に出た。そこは前方にF<sup>3</sup>の瀧が見え、ゴロゴロ石の転つてゐるレストイング、プレイスである。EよりF<sup>2</sup>の上までは、何れのピッチも十五米乃至二十米位あつて、ヴァーティカルなサウンド、ロツクからなつてゐる。ホールドは適当にあるし、相当緊張する所もある面白い所である。一ノ倉の岩場の中でも、こんな面白い所は、そうたんとないと思ふ。ルートも取りやうによつては色々取れると思ふ。幾度も来て見たい所である。氣のあつた仲間とコツヘルでお茶でも沸かしてノビてゐたらさぞ愉快であらう。

F<sup>2</sup>の所から国境線らしい毛の少しはえた尾根が、両側の岩壁の間から覗かれた。割合に近く見えたので、頂上までもうたんとは無いであらうと三人で喜びあつた。すべての不安を忘れたやうに。

此の時、武尊山の方を見ると、頂はすつかり雲に包まれてしまつてゐた。

僕達（）れを見て幾分心を痛めたが、引き帰へす氣は少しも起らなかつた。天候が崩れる前に頂上まで急いで行かうかと考へた。F<sup>3</sup>は比較的小さな瀧で、大きなチヨークストーンがつまつてゐた。水が流れてゐて、瀧の近所は、

## 主な山歴

夏 中学3年時、甲斐駒ヶ岳より鳳凰山縦走。

案内人は水石春吉。

昭和3年夏

上高地に生活し、前穂高岳・霞沢岳三本槍に登り、その後、槍ヶ岳から燕岳へ縦走。

4年3月

甲斐駒ヶ岳試登。松尾氏同行。案内人は水石春吉。

4月

伊那谷より木曾駒ヶ岳。福島、平野、小池氏同行。

12月

甲斐駒ヶ岳・仙丈岳。松尾氏同行。案内人は竹沢藤太郎、深沢松太郎。

5年2月

甲斐駒ヶ岳・仙丈岳。案内人は竹沢長衛。

6月

三ツ峠。松尾、立花氏同行。

7月

松尾、立花氏と谷川岳一ノ倉沢二ノ沢左俣初登攀。南アルプス大武川より北

しめつぽい感じがした。ヨークストーンに登つてしまへば、後はしめたものだが、生憎チヨークストンの所から下は剃がれてゐるから、とても登れない。さうかと云つて瀧の両側は登攀不可能なヴァーティカルなスラブである。しか



沢峠。松尾、立花氏同行。案内人は牛田儀次。

8月

上高地生活。前穂・奥穂・西穂・ジャンダルム・小槍に登る。松尾、安部、立花、原田氏。

10月

谷川岳一ノ倉沢岩登り練習。安部、中尾氏同行。

10月

三ツ峠。松尾、立花、原田、安部、渡辺、井上、大塚氏同行。

12月

鳥帽子岳に厳冬期初登頂。案内人は塚田由数、塚田清治。

6年1月

木曾駒ヶ岳。福島、立花、松尾、原田氏同行。案内

3月

鳥帽子岳。野口五郎岳。

たがないのでF<sup>2</sup>の上を左から大きく巻いてF<sup>3</sup>の上に出る事にした。F<sup>2</sup>の上を左にトラヴァースしてみると格好なビレイニング、レッヂがあつたので、取敢ずKとOが其処へうつた。凄いフエイスだ。上の方は、や、

平野氏同行。案内人は大和由松、塚田清治。

4月

三ツ峠。佐野氏同行。

5月

谷川岳。佐野氏同行。

5月

針ノ木岳。小倉、平野、大塚、井上氏同行。

7月

穂高淵沢生活。佐野氏同行。

10月

大倉、井上氏と谷川岳一ノ倉沢本谷初登攀。

7年1月

甲斐駒ヶ岳・仙丈岳。佐野、大倉氏同行。

3月

槍ヶ岳。藤井他4名。案内人は大和由松。

12月

穂高岳。佐野氏同行。案内人は大和由松。

51年11月

ネパールを旅する。鈴木弘氏同行。

52年11月

ネパール、アンナプルナ内院トレッキング。

53年12月

滝沢、栗林氏同行。

ネパール、エベレスト周

辺トレッキング。小倉、大倉氏同行。

オーバーハング気味であつたが、登れない事はないと思つた。僕が先づ登り初めた。Oが不安げに見ながら、アンカーしてゐる。Fの上にあるIの声だけが岩陰から聞える。緊張しながら高距を高める。岩がアンサウンドだ。ホールドは数多くあるが、何れも根本がグラ／＼してゐて、確実なのは少い。慎重に慎重を重ねて一々テストしながらホールドを求める。僕とOとの間のザイルが、伸び切つてしまつた。Iに、Oの居るレッヂまで来て貰つて、Oはザイルを解いた。その間、僕は岩にしがみ附いたまゝであつた。「ザイルを出せるよ」と云ふ声に応じて又クライムを続ける。相不変、岩がアンサウンドだ。又ザイルが一杯になつてしまつた。ザイルの端に持参の細引五米をつけて貰ふ。それもすぐ足りなくなつてしまつた。「これで一杯だ」と下でOとIが叫んでゐる。見廻はした所、レッヂは処にも無い。止むを得ず、そのまゝ、登る。登つても登つてもロックはアンサウンドでレッヂは無い。五十米位登つてから上を見ると、傾斜は益々急だし、ホールドも少なそうなので思ひ切つてレッヂの方へトラヴァースしてみた。レッヂ通しに登れば登れさうなので、直ちに登攀を続けた。十数米も登つて見ると左にテラスがあつたので、そこまで又トラヴァースをして、やうやく息をついた。かなり苦勞した。こんな気味の悪いクライムは初めてであつた。バットレスがヴァテイカルでアン

サウンドとときてゐるのだから、辛いわけだ。テラスに着いた時は、嬉しいと云ふより助かつたといつたやうな気がつた。此のバットレスの高さは六十米から七十米の間であらう。OとIがこのルートを登るにはザイルが足りないの、他のルートを求める事にした。テラスから下に向けてザイルを投げてみた。うまい具合にザイルは僕のゐるテラスの下のオーバーハングした岩をすべつてFの瀧に沿つて垂れ下つた。僕と、下に居るOとIとの間に会話が二、三交されたが、両側の岩壁に反響して仲々聞きとり難い。「アンカーは大丈夫だからザイルに頼つて登れ」と僕が怒鳴つた。Oに登りだしたらしくザイルはピンと張り切つた。掛声だけ聞えるが少しもOの姿が見えない。暫くたつとOの代りにIが登り初めた。やつとIがFに登り終えた。続いてOも登つた。つまりIとOはFとFとの間に居る所の間は二十米位で、途中一ヶ所小さなレッヂがあるが、二ヶ所オーバーハングしてゐる難場である。一息入れてIが登り出した。やつとの事でテラスに這ひ登つた。Oも登つた。一安心といふ格好でパイプを銜へたり菓子を食べたりして、クライムの困難さに就いて話しあつた。Fのピッチを登りだけで一時間以上か、つてしまつた。OとIの登つたルートはザイルに、つかまらなければ登れない所だ。一、二所は腕の力が強くなければ、

どうにもならない。この時はいつしか霧がか、つて雨さへ落ちて来た。雨は直ぐやんだが、天候が崩れ初めたのだ。此処まで来てしまへば下るのは頂上まで行くより時間がか、るので、登り方がない。休息もそこ／＼に出発する。Fの瀧は険悪そのもので、登攀不可能である。これからは、草附きに所々岩が出てゐる所だ。草附きも凄位傾斜がある。勿論 one all a time 進む。適当にレッヂがあるので具合が良い。足袋の底に穴があいたので、手拭を切つて穴ふさぎをする。こんな草附きはアイゼンを穿いて居たら余程楽であらう。短かくて割合に太い躑躅がよいホールドを提供する。草附きを登つてゐる間は、霧のため眺望はきかなかつた。ただ水の音がザア／＼と聞えた。Fの上はまだ瀧が数段あるらしい。I点についた時、一ノ倉岳が近いのを知つてヤツホを盛んにやつたが返事はなかつた。I点よりJ点までは脣尾根で所々ピナクルがある。風化されてゐるので岩がボロボロだ。ピナクルを乗り越え乗り越え、Jに達した。Jには石のつめてある錆びた罐詰が一つ落ちてゐた。先年一ノ倉尾根に登られた京大の方々が、置いてつたものかも知れない。その附近に兎のらしい白骨が散らばつてゐた。Oが記念に持つて帰るのだと云つて一個ポケットへ入れた。JからKまで呑気に歩いた。Kは一ノ倉岳の一つ手前の瘤みたいな所だ。一、二腹が空

いたのでパンを少し食べた。ヤツホをやつても一ノ倉岳から声が聞えないので、サポーターイング、パーティーはどうしたのだらうと気がかりになつた。一ノ倉岳の登りは敷がひどくて、かなりアゴを出した。やがて例の頂の細長い一ノ倉岳へ着いた。頂上へついて安心したせいか、Fを巻く、岩を落さうとして岩に挟れた指が少し痛みだした。霧が濃くなつて又雨が降り出した。笹の平へついたら、H等は来てなかつた。丁度テントを張つて居た方々があつたので、無理に同宿をお願いした。KとOは慶応の三井氏等のテントへ泊つた。心よく防寒具まで貸して下さつて、非常に嬉しかった。Iは松坂屋の方のテントに泊つた。やはり色々御厄介になつた。こゝでお礼を申し上げます。

#### 附記

本澤に登らうと思ひたつたのは、前から登りたいと思つてゐたし、それに五十嵐君から登れさうだと云ふ話を聞いたからである。実際に登つて見て、思ひの外困難だつたのには、一驚を喫した。此の登高を通じて、得たものは非常に大きい。殊にサポーターイング、パーティーの事に就いて。

- 二、二ノ澤
- 三、三ノ澤

(省略)

# 青山学習院の

## あの頃

小島 隼太郎

あの頃というのは昭和の初期、より正確には、昭和七年の前後一、二年のことである。先進大学山岳部に追いつくことと積雪期の日本アルプスに的をしぼり、力は無かったが夢だけは一人前にみえていた青春のことである。昭和七年の春山は、不幸にして当時としては珍しく遭難の多発したシーズンであった。

三月二十日、常念岳で神戸BKVの金光単人と有明口の案内塚田清治が凍死。つづいて三月二十二日、大槍小屋でRCCの三谷慶三も凍死。さらに同月二十九日、前記の金光一行を捜査のため常念岳目指して急行したパーティのうち、RCCの山笠三郎と有明の高名な案内人中山彦一と同じく高橋益司が本沢からの雪崩のため圧死した。

### (省略)

さて話は変わって我々のパーティは、大槍小屋で不幸な事件が持ちあがっている時に、温泉ホテルを出発し、徳沢を目指していた。人夫の大和由松を含めて一行五名、吉城屋の一寸さきから梓川の河原に下る。河原のあちこちの水溜りに岩魚を見つけ、手捕りする。豊漁々々こりや幸先よしと、一行一寸先は開であるのも御存知なし。折しも、上手からスキーで下ってくる人を見つ

け、近よるといきなり、そつちの道は上高地に行けますかときかれる。あたふたとその人は去る。上高地に居ながら上高地はあつちと指差すのも変なものだ。この人物は温泉ホテルの木村への大槍小屋凍死事件の連絡役であったと、あとでわかった。牧場小屋についてみると、早速某より遺体搬出につき人員差し出しの要請があった。何か高飛車の調子あり、態度は保留させて貰った。遺体搬出隊の構成は学生側早大、八高で、あとは常さんが上高地でかき集めた人夫だとのことであった。そうこうしている内に常さんが我々のところへ現れた。上高地へ来る度に、常さんの小舎に御神酒一本抱えてあがりこみ、おだをあげた間柄、おまけに常さんは我が校の名づけ親ときている。すなわち青山学習院である。本物の学習院がクサミしようだ。大正の末から学習院の大先輩の板倉、松方、波多野、岡部、伊集院等、時の貴顕紳士の子弟が常さん小舎でとごろを巻いていた。

うだ。彼等の残した強い印象から学習院という固有名詞が、常さんの脳裏に牢乎として焼きつけられたのは自然の成行きと思われる。我々は青山学院だよと訂正を申しこんではみたものの、思いこんだら百年目、あいつも変らず青山学習院だ。その因縁浅からぬ常さんが、いつもの恵比寿顔とうって変って神妙な顔付だ。遺体搬出隊の実質上の指揮者に祭りあげられた常さんとしては、もう数名頭数を必要とするのでは

非協力してくれとのかでの頼みこみである。常さんの話をきいているうちに、もつともだもつともだという気分になったから人間関係とは妙なものだ。当方と致しまして、去秋大和を使つて荷揚げをすまし、宿願の槍、穂高の縦走目ざして入山している以上、全員搬出隊に参加するわけにはまいらぬが、小島を伝令要員に大和を種隊にということ、常さんも納得し田満に話はついた。

### (省略)

この搬出作業で須田信太郎と知りあいにれたのは思わざる収穫であった。彼は早大山岳部のリーダーであり、老成篤実の趣ある人の好い男であったが、悲運にも翌年の四月、鹿島側より鹿島鎗登攀中、急性肺炎により若い生命を絶った。享年二十三。槍から帰京してから間もなく須田から自宅に遊びにこいと連絡をうけ、たしか麻布だったと思うが、もの静かな街の一隅の彼の生家を訪ねた。瀬戸物商であった。二階に案内され、こちらは専ら聞き役にまわり山岳部の運営につき、経験に基くわりの話は、中途半端に完成に近づきつつあった我々の部にとって貴重な示唆を含んでいた。関東学生登山連盟の事務的連絡や、早大山岳部々室で行われていた研究会に顔を出した際、須田は高田牧舎とかいうミルクホール風の店に連れていってくれた。須田の好みなのか、女学生向きの栗ぜんざい、蜜豆等を奮ってくるのは苦笑ものであった。

我々と大和由松とのそもその出会いはこうである。立花(東京海上本社新種保険課長—高松支社長在任中、脳出血で倒れ、療養生活後死亡)、銀座の旦那こと原田、それに大森の大塚旦那の三人が晩春の針ノ木スキー行をたくらみ、大和を同行したことに始まる。よく気をつく大和が酒の肴に山菜を料理する。酒宴酣ともなれば、親分株の立花のひとり舞台である。よろよろと立ちあがったかと思うと「RCCの中村勝郎、立教の小原勝郎、青山の立花勝郎これぞ天下の三勝郎だ」と絶叫する。ドタリと倒れて討死ともなれば、かわいげもあり中村、小原の両大人も渋い顔で黙認もしようが、ところがどっこい生酔だ。民謡から始まって歌謡曲となりジャズソングにつながり、また「天下の三勝郎だ」に立ちもどる。エンドレス・フィルムを廻わしているような塩梅に相成る。酒飲道?の達人であり、きのうきょうの付合でない常さんなら話はわかるが、初対面の大和が合の手をいれるわ、踊を披露するわで、大いに座興をもちあげたそうだ。商売に徹した大和のサービスピ精神は天晴れであるというほかない。千鳥足で帰京に及んだ三旦那の、大和の評価は低いわけではない。曰く「スキーはまあまあだし、奴は使えるよ」スキー云々は飲むばかりが能じゃない、見るとこはちゃんと見たんだと、格好をつけた匂いが強い。

### (省略)

「アルプ」265号 昭和55年3月

烏帽子岳 (青山学院)

小島準太郎

人夫 塚田清治 (有明)

塚田由数 (中房)

十二月二十二日 有明—大町 (自動車にのる)—馬返し (二、〇五)—葛温泉 (三、〇〇)

始めは由数だけ伴れてゆく予定だったが、ブナタチ尾根で幕営する積りだったので、自然に荷がふへ、由数の従弟の清治を頼んだ。雪少く、一尺内外だった。

二十三日 葛温泉 (九、四〇)

—濁小屋 (二、五〇)

雪崩はたいして出てなかった。三ノ澤附近で獵師にあつた。何処から帰つて来たのかと聞いても、明答しなかつた。大分噂のあつた密猟の一味らしい。布団を濁の沈砂小屋の金原氏より借りて来た。

二十四日

人夫二人、ブナタチ尾根の偵察に行く。四時頃道踏みの人夫がもどつて来た。三角点までガンバつて来たのだらうだ。ついでに荷物の一部を木にしぼりつけて来たのだ。幕営せずに烏帽子小屋まで行けそうなので夜は明日の準備で活気づく。

二十五日 滞在

降雪盛。金原氏の所へ遊びに行く。電気風呂にはいる。断然豪勢だ。由数が昨日の偵察でワツパを折つてし

まつたので、葛まで取りに行つた。

二十六日 小屋 (六・〇〇)—尾根に取りつく (六・五〇)—三角点 (二・三〇)—烏帽子小屋 (三・三〇)

思ひの外早く烏帽子小屋につけた。三角点より烏帽子小屋までの間は実につらかつた。ラッセルする者は、十歩毎に休息をとつた。ガレを通過する時はザイルをつかつた。

二十七日 小屋 (一〇・三〇)—烏帽子岳 (二二・〇〇)—小屋 (二二・三〇) 烏帽子岳の登りは、粉雪だつたので、ワツパで登つた。着水が張つてゐると思つて、緊張して小屋を出たが、簡単だつた。風が強かつたので、岩にしがみついて登つた。夜は祝宴をあげた。

二十八日 烏帽子小屋 (二〇・四五)—三角点 (一一・三〇)—濁小屋 (二・〇〇)

ガレをアンザイレンで通過、濁澤への降り口の悲場はルーピングで下つた。濁小屋附近に兎のワナをかけたが一匹もとれなかつた。然し足跡は無数。

二十九日 濁小屋 (一一・〇〇)—葛温泉 (三・〇〇)

スキーで歩く。雪依然少し。

三十日 葛温泉—馬返し—大町 この登山では親切な金原氏に色々お世話になつた。ガイドは兩人とも、

烏帽子岳

野口五郎岳 (青山学院)

小島準太郎・平野勲

人夫 大和由松

塚田清治

三月二十日 有明泊

二十一日 有明—葛温泉

二十二日 葛温泉—濁小屋

数回デブリを越し、割合に時間がかる。

二十三日 濁澤在道踏みに行く。

二十四日 雪 滞在

二十五日 晴 小合 (六・三〇)

—三角点 (一一・三〇)—ガレの下画飯 (一一・三〇)—烏帽子小屋 (二・五〇)

風邪の気味で小島濁澤在

雪はクラストしてゐるため案外早くつけた。靴で歩けたのは廿三日に踏んで置いたお陰であつた。三角点から上はかなりもぐつたのでつらかつた。

二十六日 烈風なり。小舎 (一一・二〇)—烏帽子頂上 (二二・二五)—三角点 (二・〇〇)

—烏帽子小屋 (二・〇〇)

—靴で行く。風のため氷雪が当るので参つた。烏帽子岩には雪が附かず、夏と同じだつた。風強く息苦しくそして飛ばされそうだった。小屋に着いてから電が降り出し、うるさくて寝つかれなかつた。

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三月

四月

四月

四月

四月

四月

二十七日 晴 小屋 (二〇・二〇)—三ツ岳 (二二・〇〇)—野口五郎岳 (二・五〇)—二二・二〇)—烏帽子小屋 (四・二五)

ウインド・クラストのためアイゼンをつけた。尾根通し行く。往復同じ道を取つた。まるで散歩でもする様な気分であつた。夜は月と星で空は綺麗にちりばめられて壮観だつた。

二十八日 烏帽子小屋 (八・〇〇)—濁小屋 (二〇・四五) 濁で小島と会つた。明日登ると云つてゐた。濁澤でスキーをやつた。

二十九日 葛温泉泊り

以下小島の記録

二十九日 東電社宅 (八・〇〇)

—三角点 (二・〇〇)—烏帽子小屋 (四・〇〇)

平野の足跡どほりにアイゼンで登。至極楽だつた。

三十日 滞在 天気良し。但強風のため、一日小屋の中で煙に苦しめられる。

三十一日 烏帽子小屋 (七・三〇)—三ツ岳 (九・〇〇)—野口五郎岳 (二〇・〇〇)—烏帽子小屋 (二・三〇)—濁小屋 (三・二〇)

—五・一〇)—葛温泉 (七・一五)

朝は曇つてゐたが、次第に天候恢復した。野口五郎岳からの眺望は素晴らしかつた。アイゼンで呑気に歩き廻つた。

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明

四月一日 葛温泉—有明



# 水石春吉回想

小島 隼太郎

水石春吉とは、いったいどんな人間なのか、一抹の不安を抱きながらわれわれ一行四名が、葦崎駅に下車したのは、昭和の初めの夏のある日のことだった。そもそも事のおこりは、われわれ中学生三名が駒ヶ岳から鳳凰山へ抜けようとプランを立てたことに始まりの富士山とN君の郷里の八ヶ岳に登っただけである。

早速、僕の親父に相談したところ、それでは甲府のこの方にと、紹介状を渡された先が甲州財閥の一員であり且もう一つの顔をもつ甲斐山岳会の若尾さんであった。甲府の何処でお目にかかり、どんな御挨拶を申し上げたか、今となってはさっぱり憶い出せない。案内は甲州側ではナンバー・ワンの水石春吉にしたこと並びに念のため、うちの若い者をつけてあげるからと、若尾さんの御声がかかりて実直そうな若い方が同伴者と相なった次第。さて話を葦崎駅に迎えに出ている筈の春吉に戻す。

真夏のカンカン照りの太陽のもと、その頃の葦崎駅前は森閑としたたたずまいで、下車したのはわれわれの他に三組みの地場の人達といった具合だっ

た。そへヒヨコヒヨコと現れた人が柳沢の水石春吉でした。容貌魁偉、鬼をもひしぐ山男と思いきや、何処にても居そうな年の頃五十歳ぐらゐの田舎のオヤジサンといった風体であった。正直のところ印半纏を着て及んだ春吉に、これが音にきく山案内か何やら当はずれの塩梅であった。

それはさておき、それからバスで信州往還を一路揺れにゆられて台ヶ原へ。亀屋だったか鶴屋だったか、兎に角お目出たい名前の旅籠兼よろず屋へ連れてゆかれ、春吉から若者二名を荷担ぎだと引合わされた。

こちらは鼻たれ小僧でも、なにしろ甲府の若尾さんのお声がかかりだから下にもおかぬ扱いだ。案内人組合のエラ方が名刺を持って現われ、痛みいりやの御挨拶である。春吉が鶴屋よろず屋で食糧からローソクにいたるまで調達してくれたので、こちらは懐手をしている間に準備完了である。

案内修業中の身の荷担ぎの背負子には、米、味噌、醤油から鍋、草鞋にいたるまで山のごとく括りつけられ、いよいよ出発である。前宮で前途の無事を祈願し、尾白川の沢登りがはじまる。もつともらしい名前がつけられた滝が次から次へと現れる。えらい人の命名だそう。春吉によると大町桂月の一行を案内して尾白谿谷を溯行した折、滝が出現する毎に桂月が一杯やるので時間がかかって閉口した由。ところどころでわれわれだが、疲れが出る

から無闇に水を飲むとずいに注意されてもつい手が出る。これがあとでどんな結果を引き起すか、後悔先に立たずとは正にこのことだ。

一方、春吉と柳沢の荷担ぎ衆は流石だ。食事の時飲んだ位であとは水を飲むのを控えている。水だけではない休む時もわれわれのように腰を下ろさずとはしない。背負子の下部を杖の二股になっている部分で支え、休憩する。あの当時の案内人夫衆のマナーの一端である。

沢登りがすすんで、いよいよ針葉樹林の中の登りとなる。この頃より雨がポツポツ落ちはじめ。薄暗くなったあたりが急に明るくなった途端、バリバリと大音響が鳴りひびく。下界で大きくゴロゴロという警告抜きき雷様だ。これと歩調を合せたように猛然と雨が降りだす。濡れ風の方はともかくとして、雷様の方は逃げ道なしのアチラ様次第で、青菜に塩の有様。

こうなると頼りになるのは春吉だけだ。小舎まであと少しだ頑張りましょうと、怯むわれわれを春吉さんは激励する。山に強い甲州男子の流れをくむと自称するN君が、もう歩けないと座りこむ。水のガブ飲みで体調を崩したことと、恐怖心によるダウンであろう。すかさず春吉はその場に荷を下ろすと、Nを背負い、荷担ぎの青年に「あとのお客さんから目を離すな」とどなる。先頭にたち、のっしのっしと歩き出す。やっとの思いで屏風小舎に辿りつき、

小舎の焚火で冷えきった身体を暖めた。蘇生の思いとはこのことか。もし春吉が居ないで、われわれだけのパーティだったら一体どうなっていたらだろうか。体で覚えた山の恐ろしさの第一章だったし、先ず客を守るといふ案内人の信条を目のあたり見せつけられた一幕だった。

一夜あれば快晴である。屏風小舎を出てすぐ鎖でよじ登る岩登りだ。N君も若さが物をいって元氣恢復、ケロツとして、学校でバテたことを喋るなよと、早くも釘をさすソツのなさ。七丈小舎をすぎ偃松地帯にかかる。前夜の雨中行進で濡れたシャツ、ズボンを偃松の上に捨てザツクを軽くする。すると春さん、

「それいらんのか」

「僕、当然のように」

「うん捨ててゆく」

「まだ使えるわい」と独り合点し、

「じゃ貰つとく」

といったやり取りで僕の着古した衣類は春さん用に二度のお勤めと相なった。

時代も相手も違うが、似たような光景を今年正月初めのアンナプルナ内院トレッキングで目にかかった。乾期に入った筈のヒマラヤも異常気象とやらで連日の雨や雪でトレッカーは悩まされていた。

出発の前など濡れた下着類、破れかかったズボンカパー等を隊員がキャンブサイトの片隅にポイと捨てる。

と、ポーターはすばやく拾いあげて、してやったりとニコツとする。なかには焚火に投げ捨てた不用品を、間髪入れずに焚火に手をつっこんで、ものにする凄腕がいる。まさに早い者勝ち、生存競争の縮図である。

話は横道にそれたが、甲斐駒頂上になんなく到着、その日は無人の北沢小舎泊り、五十年前のことだから、小舎の周りには薪は腐るほどあり、今から思えば焚火も豪華なものでした。

北沢小舎の朝はすがすがしい。出発に先立ち、早川尾根小舎は水に不自由することもあから、各自水筒の水を全部飲まぬこと、人夫には小舎に転がっていた空の一升瓶に水を入れ担がせる等、春吉の指示はテキパキしている。

当時の早川小舎は森林帯の中にあり、落ちついた居心地のよい小舎だった。小舎のもつ雰囲気を見事に描き上げている文章がある。敬愛する私の先輩のものとしたものだ。

青山学院山岳部の部報「尾根づたひ」第一号（大正十五年十一月二十三日発行）に福島昌夫（中央公論社、電通を経て、電通センター常務、本年六月二十七日死去、日本山岳会元理事）が「山小屋の思ひ出—早川尾根小舎」のタイトルで発表したものである。引用しよう。

「数時間の尾根づたひの後に、繁る白檜の森林の中に、丸木小舎が床しい姿を見せてゐた。先着の人夫衆が燃す焚

火は盛に。疲れた友は黙ってあたたつてゐた。温い食事が出来上つた頃、雨が止み、雲が切れると同時に戸口から眩しい夕陽がさし込んで来たのであつた。小舎を後に尾根に出た。繁る白檜の間から暮れゆく空を眺めてゐた。（中略）

そして亦、小舎はとみれば木の間に縫ふて輝く余光を受けて、その風雅な姿を静かに横へてゐた。紫の煙がおもむろに下つてゆく。野呂川の嘯きと白檜の梢の歌が聞えてくるばかりであつた。夜は野呂川の谷に湧く霧に乗つて訪れて来た。」

早川尾根小舎から地蔵岳を経て下山する最後のコースにはいることに相成つた。この下山コースで小さな二つの出来事が記憶に残っている。

まず第一は、早川尾根小舎を出て間もなく先行した人夫衆が焚火の跡を指しながら、春吉親分に最近ここを通つた連中がういるねと話かけたことに始まる。どれどれと春吉は燃え残りの薪をとりあげ、炭化した部分をしげしげと眺めて、ああこれは去年の夏のものだと、こともなげに言つてのけた。

途端に春吉親分は春吉先生に昇格し後光がさしてくる塩梅式となり、酔だ蛸だとイチヤモンつける者も無く一件はあつてなくチョンとなる。消防署願負けの診断振りて、柳沢あたりの消防団の顧問に推薦したくなるというもんだ。

続いてもう一つの出来事。地蔵岳の近くで屏風小舎出発以来、初めて一団

の登山者に出合つた。数人の人夫をお供に肩で風切る先頭の旦那はと見れば、詰襟の服に地下足袋と脛当てで足もとをかためている。当時、僻地の山村では泣く児も黙るといわれた當林署のお役人である。

われわれの人夫衆は素早く鉢巻をとり一歩下つて道を譲り、おまけに最敬礼か、種を明かせばなんのことはない、人夫衆の荷の中には植木屋だか薬屋だかに売るといふ数株のブツが仕舞い込まれていただけの話。古今を問わず脛に傷もつ身は辛いもんです。

大体案内人のイメージは口から口へでつくれるものだが、大正の末から昭和の始めにかけて、案内としての春吉の声価は確立したとみてよいだろう。手許にある若干の文献からその頃の春吉の活躍振りをみよう。

大正十四年は南アルプスで本格的にスポーツアルピニズムの狼煙が上がつた記念すべき年である。近代登山の季節到来である。

即ち三高山岳部の西堀、四手井、桑原、多田の四氏は戸台經由、北沢小舎をベースとして、同年三月十九日は仙丈、二十二日は間岳、北岳に登頂している。積雪期の初登頂だ。戸台の竹沢長衛と深沢松太郎を伴いスキーを使用した近代派の登場だ。

これと時を同じくして、甲斐山岳会の平賀氏は春吉外二名の人夫を同伴、三月二十八日広河原より北岳に登頂、積雪期の第二登だ。続いて三月三十一

日、三高隊が三月二十五日吹雪のため断念した駒ヶ岳に登頂成功、スキーなしの雪輪と金カンジキによる古典派の業績である。

午後一時、平賀パーティは、下山にかり積雪のため苦労している。平賀文男著「日本南アルプスと甲斐の山旅」より要約しよう。

「石室までの間に存在する雪の岩壁は、登攀するなればまづ不可能に等しいであらう。昨年の三月の雪のもつとも少なかつた時、橋本、野々垣の二君が石ノ鳥居まで登つたが、山頂を断念して引き返したと云ふ話には無理もない。

二時十分石ノ鳥居、それから屏風岩まで可成な難場だつた。四時屏風岩に下り立つた。」

「黒戸は意外に雪が深く、雪輪など用をなさない。四辺は既に真つ暗い。九時にやうやく笹の平、雪の量と陥込む事は今までと変らない。人夫は悲鳴ばかり上げてゐる。実に春吉をはじめ誰も予期しなかつた雪量である。柳沢の春吉宅へ四人が辿りついたのは、翌四月一日の午前一時であつた。」

我々青山学院パーティ（松尾・小島）は昭和四年三月、野々垣氏と同じルートで甲斐駒の試登を行った。人夫は春吉外一名である。経験不足と予想外の積雪に阻まれ、平賀氏の「雪輪など用をなさない」状態を確認し、尻尾を巻いて敗退した。まるで雪の中を泳いでいるような有様で、大変なアルパイトであつた。

五十九歳の春吉も精一杯やった。われわれと対等にあの年齢で踏ん張ってくれた。さすが一流のプロだ。立派の一言につきる。それにしても尾白遡行の時を思えば、春吉さんもおけたなあとという感慨を持ったのが、偽らざる記憶である。

念願の甲斐駒は、昭和六年十二月末、戸台の竹沢藤太郎をつれて、大倉・佐野・小島の三名で仙水峠までスキー、それから上はワカンジキを使って登頂した。前回の甲州側からの登りに比べると、肩すかしを食ったなと思っただらい楽だった。

山には犠牲者がつきものである。南アルプス冬の最初の犠牲者が出たのは昭和五年一月六日で、慶大山岳部の野村美氏がその人である。医師四名を含む南アでは空前の大規模な援助活動がくりひろげられた。一行は国分貫一氏外四名、人夫は春吉、義次の二名、野村美氏の遺稿、救援記を収録した三百ページの大部「みのる」より書き抜く。「一月五日漸く大樺御池ノ小舎に達す。六日北岳東側より登攀。吹雪のため頂上まで三十分の地点より引返す。帰途草刈りに於て雪崩に襲はれ、野村は七八百米突を急落し、左足負傷し、雪崩があったのが午前九時過ぎ見付られたのが正午過ぎであった。その場で人夫の着ていたチャンチャンコを脱せ、それに六杯(野村のニックネーム)をのせて、皆で四隅を持つて広河原の小舎に午後四時半たどりつく。

「七」は斉藤隊員と春吉は柳沢に到着救援の準備。八日は斉藤、春吉と共に葦崎郵便局に達し、野村東京邸及野村銀行東京支店に事故を通知する一方、甲斐山岳会に急を告ぐ。九日斉藤、春吉、漆山慶大山岳部員他人夫五名広河原着。十日救援隊に迎へられ、芦安へ下山の途につきしも、不幸にして十一日午後四時五十二分、野呂川畔深沢出合にて永眠」

春吉も救援活動に参加し活動に参加し活躍しているし、例の甲斐山岳会の野々垣氏も救援に駆けつけている。

この遭難が起つてから一ヶ月後、私は戸台の竹沢長衛と共に北沢小舎に居た。仙丈が目標で吹雪の毎日を送っていた。夜は焚火の煙で目をショボつかせながら、長衛の熊うちになつわる身振り手振り入りの法螺に耳を傾けている内、話はいつしか北岳遭難に移っていた。

「怪我人を半纏に乗せて草刈りを、滑り下ろすなんてドダイ無茶だ。俺ならスキーを組合せて橇をつくり、もっと怪我人をうまく運ぶな」と名指して長衛は春吉を非難した。長衛が何処からか仕入れてきた噂話だ。二十歳も年上の春吉に対する強烈なライバル意識には辟易したし、初めての出会い以来の春吉ファンの私は鼻白む思いで聞き流した。真実はどうだったのか。「『みのる』の国分君が語る遭難の顛末」の一部を参照しよう。「六杯の方はどうかと見渡したけれど、

眼の届く限りは姿は見えない。更に下つて行くと遂に大樺の池に来た。池は今の雪崩の為に大半埋まつてゐる。妙なことを発見した。一見熊でも歩いた様な足跡に点々として諸所に血痕がある。下つて行くと、大樺沢の河原に六杯の姿が目に入った。河原であり大きな石が転々としてゐるので、彼は其処からは自力で広河原の小舎までは到底帰ることが出来なかつたのだ」

救助された後は、前述のようにチャンチャンコに乗せられ広河原小舎まで四時間あまりかかっている。その間「どうしても河を渡渉しなければならぬ場所に来た。針を刺すような水中を我慢して一同命がけて」わたり、やつの思いで広河原小舎に辿り着いたのである。

救助隊の苦勞は筆舌にもつくせぬものだったろうし、春吉のことだから精根を尽したにちがいない。大石がゴロゴロしているの、長衛の言い分のようにスキーで運べる状態ではなかつたのは、これで明白だ。伝達された噂という奴は、いとも簡単に真実を振曲げるという好い一例である。

時は移り人は去り、古い時代の南アルプスの代表的案内人であった春吉も、やがては忘れられる運命にあるのかも知れぬ。この一文が南アでの登山の近代化の一翼を担った一人の山の男の面影を伝えるモニュメントとなれば幸いである。登山裏面的関心から春吉を取りあげてみた。

彼、水石春吉の菩提所は武川村の高竜寺、昭和二十三年三月二十四日没、享年七十七歳。

「アルプ」249号 昭和53年11月

## 切れたザイル

——小倉登攀史上、初の犠牲者——

小島隼太郎

河童橋で一本立てていると、通りすがりの登山者が、槍で遭難者がたそうですよと教えてくれた。明神池の手前で、一息いれるのに手頃な原生林の中にもぐりこみ、厚く散り敷いた木の葉の絨毯の上に座りこんでいた。掛け声らしいものを残すと共に、戸板をかついだ一団が、木の葉越しにくだつていった。横尾出合で槍の遭難者は、営林署の役人だときいた。槍沢小屋に立ち寄り驚くべきニュースを聞いた。遭難したのは、杉浦武夫だというのがだ。その夜の泊り場大槍小屋で始めて事故の全貌がわかった。アクシデントは、昭和五年八月五日小槍で起つた。われわれの今回の目標である小槍登攀中、杉浦は滑落により頭蓋骨々折で死亡したとのことであった。

墜死の経過は後で書くことにして、小槍の登攀史を簡単にのべておこう。大正十三年十二月発行、慶大山岳部年報「登高行」十周年記念号の佐藤久一

郎の小槍（登攀記録）から引用する。

「余程前に中山某が此の小槍へ登つたと云ふ事、又大正十一年の夏ザイルを用ひて登つた人のあつた事を聞いた。自分達の登攀したのは十二年七月二十五日の事である。」そして佐藤パーティは大槍と小槍のギヤップに到着。「ギヤップから続く東端の稜はplate-cutの姿になつて居て傾斜が鋭い。此れをとるのは不利だと思つた。ギヤップから少し登り左へ四、五米突の555（一枚岩）をトラバースする事が出来ればNarrow chimneyに達する。チムニイの右上には手頃なAnchorageが見えて居る。」一行はスラブの横断に手こずりながらもチムニイ（十五米突ほどの）まで進み、このチムニイを登りアンカレッヂに着く。第二のスラブを横切り、リブを両足で跨ぐ様にして登つた。

佐藤のこの文章に出てくる、余程前に小槍を登つた中山某とは有明の案内中山彦一をさしている。われわれが小槍を登つた昭和五年頃、中山は既に高名な案内人で、岩に強いと云われていた。僕等の仲間と彼と一緒に登つたものは、どういふ訳か一人も居なかつた。

ところで中山彦一と昭和三年の夏、小槍を登り、大阪で昭和四年三月発行された同人誌「岳」——同人には水野祥太郎、中村勝郎等R・C・Cのメンバーが顔を揃えている——に掲載され

た宇治達二の「山の人々」より抜粋する。

「去年の夏、上高地から槍、穂高辺のぶらぶら歩きに、幸ひに彦さんと行を共にして実に愉快だつた。根拠地に於ける彼の行き届いた親切と、山殊に悪場に於ての確実さとは、当然現在の彼の人気を呼んだのだらう。——中略——岩場に於ての彼の確実さは驚異に値する。小槍の写真撮る為に鞍部から殆んど頂上まで角を登り、相当ひどいオーバーハングを登つた。」

この一文の最後のくだりを読んだ私は、正直のところ呆れた。宇治一行のとつたルートは、佐藤は「ギヤップから続く東端の稜はスクエア——カット——エッジになつて居て傾斜が鋭い」と表現したストレッヂに相当する。現在小槍は岩登りのゲレンデとなり下が

り、中山が「鞍部から殆んど頂上まで角を登り」切つたピッチでは、部分的に人工的補助用具が使われている。岩場ではザイルと偶にビトンが使用されていた時代に、バランスと腕力に物をいわせて「相当ひどいオーバーハングを登つた」中山の技術には、宇治ならずともあの当時の技術水準よりすれば「驚異に値する」ものであろう。

この中山も常念で吹雪で凍死した有明村の案内塚田清治等の遺骸引き下ろし作業のため、昭和七年三月二十九日、一の沢で雪崩に巻きこまれ生命を絶つた（重遭難事件であつた。それにし

ても惜しい人間を失つたものだ。さて話をテーマの小槍滑落事故に戻そう。

夏の山小屋は早立ちの客で、暗いうちから騒然としている。朝食もそこそこに、穂高縦走組、燕行、烏帽子班と順次出発して、七時を廻れば小屋はガラガラだ。結局残つたのは僕ら一行三名だけとなり、悠々と囲炉裏端でクサヤの干物を焼く。小屋の若い者が小鼻をヒクヒクさせている。板切れに張りつけて、こんがり、とろ火で焼いた味噌だけで、飯盒一杯の飯を片づけるMのことだ、お数が干物となればすごい食欲だ。大飯喰ひは、禁酒禁煙を信条としたメツヂスト・クリスチャンの楽しみさ、なんて茶化そうなものならどんぐり眼を三角にして、もう一杯これ見よがしにかつこむことだろう。

上高地へやってくれば、常さんの小屋へ一升瓶をぶらさげてあがりこみ茶碗酒を楽しむT、あげくのはてはジャズソングをがなり、西洋人の歌がうたえると、常衆の賛嘆的になつた。二人には芸がある。酒はいけません、メシも駄目、第三の男はあわれなもんです。だがしばしだ、たつた一人わが人格を今になって認めてくれた男が現れた。老い先短い身だ、エベレストが見たいと、本年初頭のトレッキングに同行した一旧友がそれだ。小倉曰く「お前さん、青山通りの『たぬき』でよく昼飯を喰つていたな。罐入りのエア・シツプを驚掴みにして、縄のれんを頭でかきわけ入っていくムー、あれ板につ

いてたぞ」見るとこは見るもんだ、一寸ばかり気を取り直した次第。持つべきは友だ。

さてこの三人の棒組が朝飯をすませで、いよいよ仕事のとり掛りである。大槍と小槍とのザツテルに出て、小槍の裏（正面ルートに対して）に廻る。チムニイのルートにかかろうとした時、チムニイの基部に異物を発見した。中皿がすっぽりかぶさる位の広さに、黒味がかつた血糊らしきものがべつとりこびりついている。杉浦の墜落現場はここだと直感した。鮮烈なショックがはしり、黙禱を捧げる。

馬力のMがトッブで、まずチムニイを抜け、上のテラスに出る。脱ぎ捨てられた片方の靴下を発見。ここで杉浦がはだしになつたのだろう。テラスからアンカレッヂまではスラブだ。ここを直登したが、左に逃げたか記憶に残つてない。いずれにしろトッブが汗をかいた地点だ。アンカレッヂから小槍の表側に出て、クラック沿いに頂に出た。真夏の陽光は、惜しげもなくふりそそぐ。小槍の頂には静けさがあり、安らぎがあつた。頬を撫でる三千米突の風よ、強く吹け。肩の小屋を眺めると、小屋の者が、出たりはいつたりしている。ヤッホーをかける。応答なし。前夜の客を追い出して、あと片づけの真つ最中。ゼニにならぬ相手に手間暇かける馬鹿はいない。小槍の頂は静寂そのものだ。下りは前述の佐藤ルートをとる。途中、打ちこまれてあつたピ

トンに、誰かが残したリング状の捨てなわがゆらゆらと揺れる。風が出てきたらしい。ザッテルに出て本日の登攀を終わる。

杉浦の山の経歴はどうか。手元の僅かな資料をもとに、彼の山歴に、彼からうけた印象を書き加えよう。杉浦は、東京駒込の成城中学の出身といっても四年中退組だ。「山岳」五十

四年に、五年にわたって成城中学で博物の教鞭をとる傍ら、山岳部長として多くの岳人を育てた故伊藤準先生の「登山暦」が沼井鉄太郎の註解とともに掲載されているので、杉浦関係を抜萃することにする。

大正十三年

成城中学卒業（帝大農科生）杉浦武夫君と共に数名の山岳部員（中に頭

山秀三君あり）を引率し立山に向い、針の木峠の手前より腹痛を起して一行と別れ（杉浦君に依頼し）云云。

大正十四年

七月十九日出発、杉浦武夫君と共に成城中学三年生三人の山岳部員を引率して槍穂高の縦走を決行奥穂高嶽を経て右俣谷に下り蒲田川に沿い蒲田温泉に泊り（以下略）昭和元年

杉浦武夫外数名と妙義山中の白雲山に登る。

故伊藤準の「登山暦」に杉浦の名前は三回でてくるが、杉浦が小槍が墜死した昭和五年には、愛弟子杉浦に関して一言半句も書き残していない。あれほど綿密な記録を残された伊藤先生にしては、作爲的ともそれ不自然の感をまぬがれない。伊藤先生の「登山暦」よりの引用は以上で終る。

昭和二年には明大の馬場忠三郎と共に杉浦は、硫黄岳と赤岳との初縦走に成功している。これは彼の登山歴の輝かしい一頁である。

同年十二月末、親友福島と高瀬入りをして烏帽子を狙ったらしいが、悪天候のため下山している。（この項青山学院山岳部々報「尾根づたい」第二輯による）以上が僅かな資料より抜萃した杉浦の山歴である。

杉浦に私は二度しか会っていない。

福島の家での出会いが最初であった。昭和三年だったろう。その頃の新宿界隈は宿場の面影を色濃く残し、情緒ゆたかな土地柄であった。福島宅で山の話に熱が入り、長尻となる。折柄風になつて流れてきた松本行午後十一時五十何分かに発車の、最終夜行列車の哀愁のこもったアナウンスで、慌ててお神輿を上げる始末であった。そんな晩春の一夜、福島から駒場の農科大学の杉浦君だと紹介された。坊主頭のいかつい男であった。彼はフンといった調子で目礼し、その後は大島亮吉の一文で流行になったバドミントン・スタイルの出現、デント編纂のマウンテンニヤリングの挿画を食い入るように見つめていた。こちらの存在はまるで無視された塩梅だった。

第二回は初めて杉浦に会ってから僅かたつて、梅雨入りしてからだった。青学のキャンパスの花岡山あたりにあった山岳部の部室の前を檻の中の熊よろしく、うろうろしている男が目についた。誰かなと近寄つたら、片手一寸あげて、ヤアとむこうから明るく声をかけてきた。杉浦であった。「福島にあいにきたが、別に用はない」と言つたかと思ふとさささと立ち去つた。まことに呆気ない一幕であった。一見無愛想に振る舞いながら、案外この人は心やさしくシャイで、都会人に通じあう繊細な神経の持主であると思ひ知らされた。これで先日の福島宅で見せつけられたふてぶてしさは、彼の仮面

であると納得がいき、不思議に親近感が湧いてきた。

ながながともつて廻ったが、昭和五年八月五日に小槍で起った杉浦墜落事件を書く段取になった。参考にすべき文献は、春日俊吉著の『山に逝ける人々』一九三八年増訂版の「アルペンの猛者の死（小槍）」だけだ。著者も「遭難の真原因は同行二友人に聞いても今もつて判然しないと云ふ」とサジを投げている。福島がこの事件を取り上げて、「切れたザイル」という手記を大分以前に発表したらしいが、どんな内容なのか知る由もない。杉浦の同行者OとSは病死。福島も去年六月鬼籍の人となった今日、事件を説明する手掛りはない。福島未亡人からうかがった談話を下敷きにして、事件を再現してみる。

墜落後、杉浦は頭を下にして、チムニーに楔を打ちこんだようにはまり、杉浦の身体を引き出すのに手間がかかった。肩の小屋から応援の人夫の肩に背負われ、ザツテルから肩の小屋に向う途中、杉浦は激痛に耐えかねて「殺してくれ」と叫びつづけた由。肩の小屋に収容後、小屋で息を引きとつた。ここまで書いていたら、一緒に小槍を登った松尾から葉書がきた。その一節「福島兄逝つてもう一年たったか。上高地で月光の下、杉浦氏の遺体を見守つて一夜を過ぎた福島さんの話はまだ耳に残っている云々」

事故当時の杉浦のパートナーOとは

どんな人物であったのか。前記伊藤隼の「登山暦」にOは一回だけ登場している。福島未亡人と福島の後輩辻（彼は女子師範付属幼稚園、同小学校、成城中学、青山学院と奇妙に福島と同じ軌跡を辿つた）の談話を綜合すれば、次のようになる。

Oは福島、杉浦、Sと成城中学の同期で、柔道部の黒帯の対校選手でテラック下の茶帯の福島とは柔道仲間であつた。彼等は校内を胸をはつてのし歩く硬派にぞくした。早大卒業後、東京で事業をしていたOが酒に溺れているのを心配して、杉浦がOを槍ヶ岳登山に誘つたのが、事件の発端となつた。結果からみて、小槍に杉浦が、岩登りには素人同様のOとSを同伴したのは、登山常識からずれた行動と、非難されてもやむを得ない。リーダーシップをとつた杉浦にしてからが、その岩登り技術、適性はどうであつたか。

昭和三年の夏、福島と青学で同クラスのKは、たまたま穂高で顔見知りの杉浦と一緒に、前穂高北尾根をKがトップとなり登つた。杉浦墜死後、Kは一步踏込んだ杉浦の評価をした。バランス感覚に欠陥のある杉浦のトップは問題だなど。杉浦の岩登りの技術につき懐疑論者であることを隠さなかつた。主題の「切れたザイル」そのものは問題を簡単にするため触れないことにする。福島が保管していた遭難当時のザイルと、彼の手記「切れたザイル」(福島家の失火により焼失して

しまったことを付記しておく。

杉浦墜死について、推察の域を出ないが原因を二つの考え方に集約出来る。前述のわれわれ三名がとつた小槍裏側のルートにより、登り始めた杉浦は(1)チムニーからテラスに抜け、スラブにかり当人がスリッパして転落した。(2)下で待機していたOが、杉浦のコールを勘違いしてザイルに頼り登攀開始、登攀続行中の、あるいは確保体勢に移る以前の杉浦に衝撃を与え滑落させた。事故後、Oは牡蛎のごとく口を閉じ、早々に東京での生活を打ち切り、日地方の素封家の生活に戻つたまゝ、在京の知人の間に再び顔をみせることなく、郷里で亡くなった。後日Oの口から真相が明らかにされると信じ、福島は墜死の原因をあえてOに問わなかつた由。古い友人の間に疑惑の影を落し、後味の悪い事故と受けとられても止むを得まい。

杉浦の成城中学退学の件であるが、辻及び福島未亡人の談話によると、四年のに進級した杉浦は数学の授業のとき、些細な事から教師を殴打してしまふ。生徒間で人望のなかつた教師とは云え、当然学校当局は、杉浦を退学に追い込もうとする。生徒側は杉浦に同情してストライキで抵抗するという展開になる。福島は数人の同志とともに立ち上り、ストライキのリーダー格を買つて出る。福島の起草したストライキ宣言ビラは、とうてい中学生が書いたものとは思えぬ位の多量であつたと

辻はなつかしげに當時を回想した。後年中央公論社に入社早々、彼は長谷川伝次郎の「ヒマラヤの旅」を企画し、渋る幹部の尻を叩きつつ、長谷川の意向をとり入れた出版に尽力した。日本山岳会の理事としても機関誌「山」の編集の任にあつた。

同情ストも空振りに終り、ついに杉浦の退学は決定的段階にはいつた。福島は、親父と知りあひの日本中学校長杉浦重剛―国粹主義的教育者、東宮御学問所御用掛を勤め、大正十三年没―の許に杉浦同道の上、日本中学への転校を頼みにいつた。第一回目の面会では、そんな乱暴者は困るとスゲなく断られた。二回目には先客がいた。校長と先客との会話には青年の客氣をいましめる校長の教訓が織り込まれていた。彼等は首をちぢめる。さんざ待たされた後、校長はただ一言「明日から登校せよ」と言つただけであつた。杉浦を主人公とする帰りにぬ青春のロマンチズムに幕をおろそう。

杉浦は学生時代からアルバイトとして営林署の見廻り役を相勤め、卒業後正式に営林署の役人になつた。職業柄杉浦には私の知らぬ山の生活者に対する別の顔があり、恨みつらみを抱かれたいは想像できる。実像の杉浦に醒めた目を向ける人々がいたのは事実である。その一つ。初見一雄のエッセイ集『すこし昔の話』から引用しよう。

「昭和の初期以後、彼（上高地の常さん―筆者註）と知り合つてからも

一緒に山に登ったことはない。もうその時は岩魚漁専門で、山歩きなどは全然といていいほど見向きもしなかった時であった。たつた二度、小槍で墜落して死んだ一悪漢—これはどう考えても好漢の反対である。これについては書く機会もあろう—の遺体搬出の時に、一緒に槍沢に登ったことがあるだけだ。

## 追悼

### 無愛想の魅力

小倉 克巳 (昭一・商)

「暖くなったら底い山歩きに行こう、このごろ昔話しが出来る人がいなくなるのは淋しいね。」小島君の生前の便りである。茅ヶ崎の病院に見舞った折言葉が口から出ずいらいらしていたが本当に苦しかったことと思うが僕には言いたいことが或る程度伝わって来るのが解つたように思う。一年半の闘病生活中も山の本を枕元に五、六冊置いて山を想えば人恋し、人を想えば山恋し、と歌人百瀬慎太郎氏の遺稿を偲んでいたことと思う。

大町山岳博物館の竣工式に小島、大倉両君と三人で出席した折り、山菜水明の有明に昔の名案内人塚田清治、大

あ ( )ら五十年、一悪漢はすでに石の下、黙してかたらず、さらさらと風に鳴る青い草墓石を覆いかくしている。片や「すこし昔の話」で文名大いにあがった御仁が相手では、どだい勝負にならぬ。山に情熱をたぎらせて、若い生命を閉じた悲運の人、杉浦を安らかに眠らせてやつて下さい。

「アップ」559号 昭和34年9月

和由松のお墓参りをしてゆこうと言うことになり穂高町の大和由松の遺族の家に伺った。家の中には、山の諸先輩方と同行した当時の写真が、づら、と額に入れて飾りつけてあった。名案内人由松のお墓は常念岳を背景に、戒名は常念に因んだ立派なお墓であった。三人は野の花をつんで墓前に手向けた。由松の戒名が日記にあったのでここに載せておきます。

善岳院夏雲常照清居士 六十七才没

塚田清治のご仏前にも参拝して未亡人と別れて来たがこの発案も小島君の心の細やかさからであった。小島君は元来が無愛想で難しい人間のように思われがちだが愛想の悪いところが魅力があつて僕等には尊い岳友だった。

「僕が九州に単身赴任した折も鶴沼の留守宅を時折見舞つてくれ」と、つくづく言葉をかけてくれている本当に温

い優しい面をもつた親切。山の友だったし未だにその余韻を漂わしてくれている。もう同期の岳友は一人も居らなくなつた。本当に昔話しのできる人がいなくなるのは淋しい。

だけに部室全体の空気が燃えに燃えていた。その中心がハヤチヤンだった。ボクもその空気のトリコになり部室通いがつき当然のように卒業、そして山岳部入部とあひなつた。三ツ峠、マチガ沢、剣岳合宿などのコースをへて、ザイル捌きもなんとなくスムーズになつたある日、ハヤチヤンから、

### ハヤチヤンとボク

大倉 寛 (昭11・文)

「君、山が好きか。部室へよつて山の話でもしてや。」

幸い本谷を登りF3の右フェースから一の倉尾根をへて、一の倉岳に出たが時によりスラブをハダシで登る技術をハヤチヤン身をもつてしめしてくれた。

偶々山靴をはいて校庭を歩いていた中等部五年のボクに声をかけてきたのが当時高等部四年のハヤチヤン (故小島隼太郎氏) だった。昭和六年九月の始めのことである。クラブ長屋の二軒目が山岳部々室だった。ヨーロッパアルプスの地図やワカン・ザイル等が飾られている壁、登山予定が書かれていた黒板。ベンチ椅子に腰かけ談論風発していたのが、松尾敏夫、立花勝郎、原田市三郎、藤井四郎 (いづれも故人) 一人黙念と北大山岳部々報を読んでいたのが小倉克巳さんだった。

その後、ハヤチヤンが部室通いがつき当然のように卒業、そして山岳部入部とあひなつた。三ツ峠、マチガ沢、剣岳合宿などのコースをへて、ザイル捌きもなんとなくスムーズになつたある日、ハヤチヤンから、

その年の七月、谷川岳一の倉沢二の沢を初登攀したのを始め厳冬の烏帽子岳初登頂等の記録を作り関東学生登山連盟でも幹事校として活躍していた

「十月に一の倉本谷をやる井上 (文雄二年)、大倉 (寛一年) クライミング・パーティーだ。」

で「倒れた時、読みかけの山の本が数冊開かれたままでした」享年八十。菩提寺、小石川常泉院。英光院良泰準應居士。合葬。

## 小島先輩の思い出

佐野 良夫（昭11・商）

私は昭和十一年の商科卒ですが、昭和六年文科に入学一年で中退し翌年商科に移りました。

文科に入学したと同時に山好きの私は山岳部に入部しました。このとき小島先輩はリーダーで私を温かく迎え入れてくれました。当時の小島先輩は関東学生登山連盟加入のトップ校早稲田・慶応・日大・慈恵・立教・帝大・一橋などに伍しさらにこれらをリードする部に育て上げたいとの意欲に燃えておられましたからたつた一人の入部者の私を大切にしてくださいとすぐ私を四月の三ツ峠岩登り練習、五月谷川岳、七月夏期休暇の二週間の穂高瀧沢キャンプ、十月谷川一ノ倉をそして十二月にはスキーを履いたことのない私をつれて南の仙丈岳に登り一月二日頂上に立たせてくれました。このようにして小島先輩は最後の学年を私の特訓へ力を入れ昭和七年卒業されてゆきました。卒業された当時青学に新設の研究科に入学されても絶えず部に顔を出さ

れていました。私は商科の一年生として四月からも小島先輩はすべての山行を指導してくださいました。先輩は大変気さくな方で小倉・平野先輩や一年下の立花・原田・藤井・渡辺の先輩が「準ちゃんと呼ぶので私までが「さん」づけで呼ばず「準ちゃん」と読んで別々に気にもしなかったことでした。その代り先輩は私を佐野とは呼ばず常に「ボン公」と呼んでいたことを覚えています。こんな親しさが当時の先輩後輩を取りもっていました。

さて私の小島先輩と同行の一番の思い出は二人きり切りで北穂目指して七年十二月二十七日東京を出発したときのことです。当時の冬の穂高には四日ばかりで徳沢に辿りつくありさまでした。初日松本ひだや、翌日中ノ湯、次は上高地をして徳沢でスキーを履いたり担いだりの繰り返しました。幸い三十一日は快晴でしたので徳沢午前二時出発六時三十分池の平に着いたのですが小島先輩のシールが切れたので登頂を断念徳沢へ引き返しました。でも午後猛吹雪となったので切れたことが幸運なことでした。徳沢で修理をしたが着装して試走するとすぐ切れてしまうので先輩は登頂を断念帰京することになりました。私には単独で登頂するよう指示され、先輩の熱意に押され同意しました。激しい降雪について上高地へ先輩を見送る途中徳沢へ向う帝大の圍塩研二郎氏と立教の逸見真雄氏とに出会った。両氏とも先輩は顔見知りて

私を二人に紹介し単独で北穂に登るのだが宜しくと言ってくれました。夕刻徳沢へ戻り両氏と炉を囲み北穂の登攀ルートをねんごろに聞かせて貰いました。

その夜から晴れたので一月二日午前二時徳沢をあとにして北穂東南尾根下にスキーデポし午後一時に北穂頂上に立ちました。尾根づたいに奥穂に向い穂高小屋に着いたのは三時半でした。先輩の指示と激励がなかったら北穂単独登頂は実現しなかったのです。又圍塩・逸見両氏の適切なルート指示にも大きく負う処がありました。七年の冬期登山は八年度卒業の先輩が就職活動で妨げられたが小島先輩は部活の中止を許さず私と二人で北穂高登攀へと向ってくださった程の熱の入れ方でした。私の五年間の山岳部生活を学生時代の最も楽しい思い出として頂けたのは全く小島先輩のおかげであったと言わざるを得ません。

## 小島先輩を偲ぶ

鈴木 弘（昭19・商）

小島さんが亡くなったとの知らせは私にとっては寂しさとか哀しさを超えてまさにショックであった。ハヤチャンの愛称で小島さんは、OBの誰からも敬愛されていた。

小島さんは戦後OB会の再建に幹事長として尽力され、その後副会長を経て五四年には会長に選任され、昭和六〇年に名誉会長に推挙された。今日まで一貫して文字通りOB会の柱であり、小島さんの熱意とご指導のお陰で今日のOB会があるのである。

小島さんは山を愛し、山岳部を心から大切にされていた。その山歴は今更私から申し上げる必要はないけれど、しかし小島さんの口からそれらの数々の山行についてはほとんど伺ったことはなかった。お尋ねしない限り自らそれを語られる方ではなかったのである。

私ごとくに小島さんについて印象に残っているのは、幹事長交替のことである。栗林君と私は忘れもしない東京駅近くのある店に突然呼び出された。なんて呼ばれたのか分からぬままそこに行く。「幹事長を二人のうちどちらかで引き受けてくれ」と切り出され、諄々とOB会についてのお考えを述べられた。二人は唯黙ってお話を伺うだけで、言わば先輩の命令であり訓示であった。そして結局は私が代わることになったのだが、小島さんからこのようにきつぱりと申し渡されたことは、この時だけである。

ネパールへご一緒したことも忘れられない。小島さんもネパールはこの時が初めてで、ダルシヤン氏に会って青山の次の遠征について熱っぽく話をされていた姿が今でも目に浮かぶ。

私たちは数々の教を残された小島



さんを決して忘れてはならないし、それをまた後輩に伝えていかなければならないと思う。  
心から冥福をお祈りしたい。

## 小島さんの思い出

木村 太三郎(昭25・建)

小島さんの思い出の中で特に印象深いのは私がOB会で幹事長だった頃のことです。

初めての海外合宿になったアラスカ遠征の時です。隊長をお願いしていた徳久先生がお子様の急病で急に不参加になり後任をOBで唯一人アラスカ経験者である栗林OBにお願いすることになりました。丁度この時、栗林さんはお仕事を交えようとなされており誠に大切な時期であったのを無理に引き受けて頂くことになりました。この件を小島OBに報告に行きますと、

「栗林さんにはご迷惑だけでもお願いせざるをえないな、せめて栗林さんには保険に入って頂こう」と言われ保険の費用を差し出されました。勿論我々も準備しておりましたが、山岳部初の海外合宿を成功させるため犠牲を払われる栗林さんへの感謝の気持ちをこらしたかたちで示される小島さんには昔のこわい先輩の面影ではありませんでした。

次は、マラヤ遠征の時でした。当時小島さんはお勤め先が厚木でしたので経過報告のために、小田急厚木駅で待合せを致しました。その日改札口を出ますと、むこうの方から小ばしりに急いで来られる小島さんの姿が目に入りました。いかにも早く話を聞かせるといった感じにみえました。当然話は前向きで、これは何んとかヒマラヤ行きを実現させなければならぬとすい分はげまされました。

その後も坂岡さん、福島さんに自ら協力要請をされるなどヒマラヤ推進の原動力になって頂きました。

十年程前、私が札幌に転勤するまでは丹沢など何回か小島さんの山歩きにお供する機会がありました。昼食になり火をおこす時など往年のするどい日付きにもどられ、じつと見つめられますと一発で火がつかないとおこられそうな気になり、何時までたっても山岳部はさびしいものだと感慨にふけったものでした。

その後私が再び東京に戻った或る夜、小島さんから電話を頂きびっくりしました。

「坂岡さんの思い出を書いているが、昔、君が坂岡さんと白馬へ行った時の話が面白かったので詳しく聞きたい」というお話でした。おかげ様で二十数年前の出来事をなつかしく、思い出させて頂きました。それにしても小島さんは山に関する事柄を何時までもおぼえておられ、そうした小島さんとお話

するのが楽しんでいた。心から心の中で小島さんとお話しなから山登りを続けるつもりです。

## ゴルフコンペの

### お知らせ

かねてより、OB有志で行われていたゴルフコンペの状況をお知らせします。

今後は、OB会の行事として、より広く皆様にお知らせしていくことになりました。

### 第一回大会(昭和63年4月27日土曜日)

開催地・つくばカントリークラブ

(茨城県筑波町)

参加者・10名

山脇隆夫(昭32) 青木利夫(昭33) 三須絹一(昭34) 斉藤友志郎(昭35) 柴田修一(昭35) 山村 淳(昭36) 平野 興一(昭36) 白井 茂(昭37) 桜井稔己(昭39) 中條好司(昭39)

成績

優勝・三須絹一

準優勝・白井 茂

ブービー賞・斉藤友志郎

ベストグロス・斉藤友志郎

## ☆会費納入のお願い

『緑ヶ丘通信』の発刊されるたびに、このようなお願いが紙面に定着してしまいました。担当者としては、まことに心苦しくもあり、また、甚だ残念なことでもあります。

ここの二、三年ほど、会費の徴収が思うに任せない状態です。したがって、わが山岳会の運営にも大きな支障をきたしていることは、申しあげざるまでもありません。

何かと出費の重なる毎日とは存じますが、会員諸氏のご協力を御がないかぎり、スムーズに会を運営することはできません。実状をご賢察のうえ、何卒、よろしくお願ひ申しあげます。

●63年度会費 一〇、〇〇〇円

お振込先

富士銀行八重洲口支店

普通預金 一一四一五四六七六

青山学院大学緑ヶ丘山岳会

中条好司

### 総評

当日の天気は花曇り、つくばねCの山岳コースにチャレンジした第一回山岳部OBコンペ  
自己申告のハンデイを平野幹事が独断と偏見で修正した結果、上記の成績となりました。(中條記)

### 第二回大会 (昭和63年9月3日土曜日)

開催地・アジア下館カントリークラブ  
(茨城県下館町)

参加者・15名(内ゲスト1名)

※宝町庄一郎 齊藤友志郎 山脇隆夫  
※角田 健 桜井稔己 田村淳  
※平野和夫 白井 茂 中條好司  
平野興一 ※市野道夫 柴田修一 三須絹一 ※永井敬一

ゲスト参加 富山(地元有力者)  
※印の5名の方が、初参加いただきました。ありがとうございます。

### ●お知らせ

永井OB等が中心となって、有志で行っていた、『秋の上高地・明神行』は、本年より、別掲のゴルフと同様、恒例の行事にもっていくことになりました。

時季になりましたら改めて通知しますので、皆様、是非参加して下さい。

### 成績

優勝・中條好司  
準優勝・宝町庄一郎  
ブービー賞・白井 茂  
ベストクロス・齊藤友志郎

ごあんない

### 第三回緑ヶ丘山岳会

### ゴルフコンペ開催について

第一回、平野幹事(昭和36年卒)、第二回三須幹事(昭和34年卒)のご尽力により開かれたゴルフコンペも第三回より、緑ヶ丘山岳会ゴルフコンペとなり、O・B会行事の一環として年二回開催されます。

第三回の開催予定日、場所は別記の通りですが、みなさまふるってご参加下さい。

日時 4月8日(土) 9日(日)  
場所 アジア下館カントリー倶楽部  
会費 未定

第三回大会も青木先輩のお世話になり、ゴルフ場の手配と共に当日(8日)はコンペ終了後、青木屋ホテルにて、パーティーと飲み会を開催し、そのまま宿泊して翌9日朝、解散を企画しております。

当番幹事として、ご参加のみなさまに楽し( )日を過ごしていただけますよ

### 新年会

### のお知らせ

1989年新年会を左記のとおり行ないます。万障お繰り合わせの上、是非ご出席下さい。

- 1月28日(金曜日)  
午後6時30分
- 日本橋「いづみや」
- 会費 5,000円

同封のハガキで出欠をご連絡下さい。



う頑張ります。

ご希望の方はご一報いただければ幸いです。詳細は決定次第ご連絡いたします。

(第三回コンペ当番幹事、中條好司 連絡先 株中條企画03-273-388)



### 編集後記

小島先輩の功績を偲び、特集としまし  
た。  
まず、寄稿していただいた各氏にお礼  
申し上げます。

編集にかかって、資料が何もないとい  
うことを再認識させられました。たと  
えば部やOB会に、谷川岳一の倉沢初  
登攀の記録が何一つ残っていません。  
五〇年史制作の話があったときに藤沼  
OBが提供した、関東学生山岳連盟の  
報告書(これは記録発表当時の貴重な  
文献)も結局、出てきませんでした。  
今回の編集に当って、この記事を省略  
するわけにはいきませんので、また、  
藤沼OBに依頼し、古書店から入手し  
てもらおう、という労をかけてしまいま  
した。ありがとうございました。